

3月例会報告

【日時・会場】2001年3月16日(金)18:30～筑波大学附属高校体育教官室(ビデオ上映)→19:00～21:20
会議室→～1:30 カリンカ

【参加者】五香純典(筑波大学大学院) 加納樹里(中央大学) 鈴木崇正(NEC クリエイティブ) 田中俊也
(自治医大) 中塚義実(筑波大学附属高校) 葉梨忠男(テレビ東京) 広瀬一郎(スポナビ) 笛木寛(大学
講師) 松下徹(一橋大学スポーツ産業論) 宮崎雄司(サッカーマニア編集・発行人) 吉池淳(カルチャア・
コンビニエンス・クラブ)

【新規参加者】赤坂優太(日本サポーター協会) 野上龍哉(日本サポーター協会) 松本佳世子(日本サポ
ーター協会(JSA))

注)参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでも
コミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものでは
ありません。

サッカーTVを斬るーサッカーファンの開拓にTVはどう貢献できるか
葉梨忠男(テレビ東京)

「サッカーTV」はテレビ東京のサッカー番組で、1998年のフランス大会前後、正確には96年10月～
99年3月の間、深夜枠15分番組として、コア層を対象として放送されていた。その後休止していたが、
2000年10月より毎週木曜日深夜24:45から30分間放送されている(12月からはBSデジタルでも毎週
水曜日15:00から60分間放送されている)。

サロン2002月例会では、98年10月に「サッカーTVアイの試み」が、そして新しいサッカーTV誕生
間近の2000年9月例会でも「見易いサッカー番組とはーサッカーTV復活!」と題して、いずれも葉梨
氏より報告されている。今回は、復活したサッカーTVを題材として、「サッカーファンの開拓にTVは
どう貢献できるか」について議論した。葉梨氏の話(シェアではありません)をもとにディスカッションし
ながら進められたこの回の報告は、報告者(中塚義実)が話題ごとに内容をまとめて再構成したものを参加
者のチェックを経て公開するものである。

<全体構成>

<1>「サッカーTV」ビデオ鑑賞

<2>ディスカッション

1. 番組の前提・背景
2. 番組の内容について
3. 今後の課題

<1>「サッカーTV」ビデオ鑑賞

1. 3月8日放送分(18:30~19:00)

主な内容…ゼロックス・スーパーカップ分析/1970W杯イングランド vs ブラジルよりーゴードン・バックスのファインセーブ/2001 Jリーグ開幕直前情報/モンテディオ山形の挑戦/レオナルド・インタビュー/Jの記憶(1993年)

2. 1月25日放送分(19:00~19:30)

主な内容…トルシエ・日本代表を語る/モンテディオ山形の挑戦/Jリーグ移籍状況/1974W杯西ドイツ vs オランダよりーオランダ先制PK/ヤマザキナビスコカップ情報/滝井蹴球教室ー柳沢選手のオフザボールの動き/ファンタジスタの系譜ージーコ・インタビュー/日本蹴球界のサムライたち)

<2>ディスカッション

1. 番組の前提・背景

1) 想定している対象と全体の構成

前回のサッカーTVはサッカーマニアをターゲットとしていたが、今回はもっと間口を広げて番組作りをしている。久保田光彦アナウンサーにはマニアの目線で、女性キャスターには、初心者だがサッカーをもっと知りたい人の意見を代弁する形で進めている。

1月25日の放送は、トルシエのインタビュー、山形の第1回目、サッカーTVアイ、誰もが知っている選手のインタビュー、そしてお宝映像と、バランス的には一番できがよかった。啓蒙寄りにしつつ、どれだけテレビ的に見せられるかが課題。

●サッカーTVは、小説や物語よりも「雑誌」のような感じの番組である。最初から見なくても、どのページから読んでもかまわない。連載記事もある。

2) 時間帯(木曜日 24:45~)と時間枠(30分間)

木曜深夜の時間帯では速報性は不要。時事ネタではなく、解説ネタでいく。また、一つのネタは連載もののような形で少しずつ出していく。トルシエのインタビューは、1時間半ぐらいの話を4回に分けたもの。それでも地上波では収まりきらない。

通常は、VTR→その受けをスタジオで→スタジオで振って→VTRに行くというのがよくある形。しかし30分という時間を考えて、VTRの話はそこで完結し、スタジオでは別の話というように、ぶつ切りにしている。深夜は「ザッピング」が激しい。どんどんチャンネルを替えられる。それに対応するためにも、一つのネタを短く構成し、テンポよく進めて行くようにしている。ゲームでない一つのネタが5分以上続くと、視聴者は飽きる。

いいネタが多いから入りきらないというのもある。30分という短い時間にまとめるのが非常に難しい。

2. 番組の内容について

1) サッカーTVアイと「滝井蹴球教室」

サッカーTVアイ

サッカーの戦術を、TVというメディアでどのように説明できるのか。前回のサッカーTVの中で追究した結果編み出されたのが「サッカーTVアイ」。これを用いた滝井敏郎氏(東京学芸大学)の解説は、入り口のファンにはわかりやすく、そこそこわかっている人にも納得してもらえるものである。滝井氏の時間の都合もあって、常時というわけにはいかないが、これをシリーズでやっていきたいと考えた。そのためにはよい素材を撮らないとできない。

中継ではゲームも選手も見せなくてはならないが、このバランスが難しい。今はどちらかというところ「選手」を見せる傾向が、どの局も強い。面白くして視聴率を取らなくてはならない。過剰な演出が生まれる背景もそこにある。ニュースの取材映像は、引くでも寄るでもなく、中途半端になりがち。普通は、これらすでに撮ってある映像を使って解説するが、その映像は解説用に撮ったものではない。

サッカーの戦術をきちんとみせようとした場合、そのための映像を撮らなければならない。5つぐらいの約束事があるサッカーTVアイは、カメラマンにとってはきついが、戦術解説のための映像素材にふさわしいものである。

滝井氏の解説

滝井氏はもともと、ピッチ上のある瞬間を捉えた「写真」を用いたゲーム分析、サッカーの戦術分析を進めていた。90年代はじめには、サッカーマガジンでの連載が1冊の本にまとまった(『ワールドサッカーの戦術』)。

高校時代のコーチでもあった滝井氏に、葉梨氏がテレビでのサッカー解説の話を持ち掛けたのは、その本がきっかけであった。写真だけでなく動画で説明してもらえたらもっといいのではないかということで、滝井氏も同じことを考えていた。協会でもゲームの映像は撮っている。しかし、機材の弱さ、カメラマンの未熟さによって、本当に良い映像が撮れない。プロのカメラマンがとった映像で戦術を解説できないか。こうしてサッカーTVアイが開発されたのである。

サッカーTVアイの画像は、「勝敗の分かれ目」などの解説用に用いることもできるが、「滝井蹴球教室」においては"教材"である。特に、プレーしないファンに、もう一步踏み込んだサッカーの面白さをわかってもらいたい。どこがすごいのか、なぜすごいのかを知ってもらおうということである。

●「なるほどね」が必要。すごいプレーはなぜ生まれるのか(例：小野伸二はいつ周りを見ているのか)、

あるいは、そのプレーはなぜすごいのか(例：柳沢のスペースを生むための動き)を解説する必要がある。

●野球観戦から入って来たサッカー観戦の初級者が、中級者にステップアップするための素材がない。紙の上で、線や矢印で表現されてもイメージが浮かばない。面の動きが見えない。このような人にとって、滝井蹴球教室はありがたい。

これからの映像

サッカーTV アイは横からピッチ全体を見渡す映像であるが、「次はゴール裏で見てみよう」など、いろんな角度からの映像がほしくなってくる。一つの試合にサッカーTV アイ用のカメラ4台というのがベストだと考えている。

レンズが3つついているカメラが開発された。そのカメラを用いると、ピッチ全体の映像が一つのカメラで撮れる。これを今度のワールドカップまでに間に合わせて屋外スクリーンで流したいと考えているグループもある。

真上からの映像も、戦術を理解する上ではよいのかもしれないが、テレビというメディアで、人が点で動くような映像は、見た目の面白さが感じられないのではないか。実際はイメージカットでしか使われな

いだろう。スカパーが「FOOT」という番組で用いているのは、カメラの映像を、選手や審判の視点に置き換える画面である。しかし今のところ静止画像でしかできない。ゲーム画面にはならない。

今年のスーパーボウルで、一步進んだ映像があった。メインスタンド側からタッチダウンの瞬間を見ていたのが、何の違和感もなくカメラが空中を跳んで上に行く映像になったものである。これは、何台かカメラを置いておいて、それぞれのカメラの映像を、時間をずらさないように、しかもスムーズに、コンピューターが一瞬のうちに計算をして素材を組み替えてスローで見せるという技術であり、置き換えではなく実写が動く技術が用いられている。今のところ短い映像でしかできないが、今後、どのように発展するのか注目される。

これらの技術は、地上波において、興味を持たせるために見せるということであれば利用価値は高いかもしれないが、大切なのは、わかりやすいポイントを見せることができるかどうかである。地上波ではあまり使われないのでないか。CSの有料放送であればまた異なるだろうが。

2) 懐かしい映像のコーナーについて

新しいサポーターの人たちから、「ベッケンバウアーやボビーチャールトンという名前が出てくるけど、何だかわからない」という話が沢山あった。ダイヤモンドサッカーを長くやっていた関係上、映像素材はテレビ東京に沢山ある。そこで、懐かしいワールドカップの映像などのコーナーを設けているが、たとえ10～15秒であっても、30分の番組では貴重な時間。4月からは「サッカーサブカルチャー」のコーナーができることもあって、どうすればよいか検討中。

●バンクスのファインセーブについては、サッカー雑誌等で散々語られていたが見たことがなかった。はじめてそれをみた時には「ついに巡り会えた」と感じた。映像枯渇状態のまま活字の方でイメージを膨らませて、ほんの少し映像を見せる古典的な手法は今も生きているのではないか。

●映像のアーカイブスの問題。あと 1~2 年で、ネット上でいつでも動画が見られるようになる。現在、技術面でも権利面でも、これが可能になるように準備が進められている。

■「伝説のプレー」がインターネットで、安いお金、あるいは無料で配信されるようになると、インターネットが"百科事典"の役割を果たす。その場合、テレビはただ見せるのではなく、見せ方を変えていく必要があるだろう。「なるほど」と思わせたりする"びっくり箱"のような存在がテレビか。

3) 「オプタシステム」によるデータの活用

イングランドでプレミアリーグが始まる前から採用されている、選手評価のために作られたプログラムが「オプタシステム」。全部で 90 項目をチェックし得点化。かつてはゲームを見ながら何人もでチェックしていたらしいが、今はビデオを見ながらチェックしている。開発に関わったのは元プロ選手、監督・コーチ、人事評価の専門家、弁護士など。イングランドでは雑誌・新聞・テレビで活用されている。もっともこれは、オンザボールのデータ。

去年の J リーグの、オプタによるデータ化は既に終わっている。例えば、去シーズン、ストイコビッチに集まったボールの数とさばいた数と、今週のゲームでどれだけストイコビッチに集まってさばいたかを比較し、映像で撮ったストイコビッチのフォローの速さ、多さを含めて分析することで、「今年は確かに違いますね」ということが言えたらいい。このような活用法を考えている。

●研究者がやっていることと、テレビやさんがやろうとしていることは近いものがある。ストイコビッチの分析は研究者もしている。こういうこともテレビの中に織り込んでいけると「なるほど」の一つになる。

■普通のテレビの人は、オプタ自体も懐疑的にみている。「数字が何？絵で見せればいいじゃない」という人が大多数。雑誌では使われるが、テレビで使っているのはサッカーTV だけ。昔のサッカーTV であれば、科研の人と意見を交わしてやっていっただろうが、今はもっと単純なところで進めている。

4) エンディング

インタビューからエンディングにかけては、ディレクターが思う存分創作できる部分。膨大な素材の中で、担当ディレクターが何を選ぶかである。

●後味の良さを残すためにもエンディングが重要。サッカー文化の広がりやエンディングで紹介するの

も良いのでは。

■「すごい！」という映像はいくつもある。それを「サブカルチャー」のコーナーでやってもらおうと考えている。

5) サッカー・サブカルチャー

4月からは、川平慈英氏による新コーナーがはじまる。これまではプレーの話が中心だったが、サポーターの話や、「(ボールボーイなど)俺にやらせろ」コーナーなどを考えている。スタジアム紀行という形で、10会場については紀行ものをやると思う。CSでやっている「世界サッカー紀行」は、地上波ではまだまだ難しい。

6) toto の取り上げ方

番組としては5%程度しか考えていない。取り上げればより多くの層を対象にはできるが、サッカーファンと、これからサッカーファンになろうとする層が toto 購入層とするなら、両方を番組の対象とするには、30分という時間は短すぎる。今の30分でも、サッカーファン全般を捉えるのは相当難しい。多少コアなファンをオミットしかけている現状で、そこまでは広げられない。

また、予想の話がこの番組の中でしていいのか。今は番組のトーンとしてもちょっと入れにくい。取り上げるとすれば「サブカルチャー」のコーナーか。しかし、テレビ東京においては、射幸心をあおってはいけないという編成の指導もあるので扱いにくい。

3. 今後の課題

1) 視聴率を上げたい

関係者や選手からは「見ているよ」と評価されるが、視聴率がいまいち。2%後半までは来ているが、目標の3%には届かない。2%を切るようになったら番組存続も厳しい。このあたりが悩み。

プレゼント葉書の数などを見ても、ビデオ視聴を含めるともっと行っていると思うが、視聴率に反映されるリアルタイム視聴者を増やす必要がある。もう少しリアクションがほしい。たまたま深夜の時間帯でもあり、スポンサーに無理を言える状態が、2002年を控えたサッカーにはある。その意味では、2002年への追い風は多少ある。2002年がなければ、民放においてこれまでと何ら変らないだろう

2) 地方局へ広げたい

今は関東ローカル。テレビ大阪はまだ放送していない。4月からは大坂と北海道で何とかなるか、というところ。見てもらわないと仕方がないので広げていきたい。

テレビ局とチームの関係は、取材したものを露出できるかどうかにかかっているが、地方局が地元のチ

ームを取材して露出できる機会は意外と少ない。関係を深くしたいのに深くならないのが現状。

系列局に、地元のチームの取材をさせることも考えている。また、こういう番組を使ってサッカーの取材をしたいというニーズは、Jリーグ映像を通して入ってきている。

山形の映像はテレビ東京で作った。しかし山形の人は見られない。「買って下さい」と言うしかない。サッカーTVの場合は、パッケージとして販売する。細切れでは販売できない。

3) サッカーTVの情報を別の形で発信したい

地上波で流せるのはごくわずか。例えばジーコのインタビュー。1時間の内容を6回に分けたが、半分も流していない。面白い話をしているけど時間がないのでカットしているところは多い。これらをひとまとめにして、インターネットで配信する準備を進めている。

サッカーTVアイはDVD化して販売し、選手やコーチが教材として活用してもらえるようにしたい。

<感想・意見(中塚義実)>

「サッカーTV」関連の発表は今回で3度目だが、サッカーの「何を」(内容)、「誰に」(対象)、そして「どのように」(方法)"伝える"のかについての放送現場の取り組みは、同じ"伝える"ことを仕事としている("伝える"だけでないのはもちろんだが)者として非常に興味がある。特に「どのように」に関して、どんどん進歩するテクノロジーにどう対応していくのかが新鮮で面白い。

今回特に興味を持ったのは、インターネットで動画が配信され、「伝説のプレイヤー」などの映像が見たい時にいつでも見られるようになるという話である。"動画付きのサッカー百科事典"を手にした時、我々の"時間"は、そして"想像力"はどうなるのだろう。

"想像力"について、ある番組で聞いたベッケンバウアーの少年時代の話が印象に残っている。1954年のスイス大会決勝。9歳だったベッケンバウアー少年は、西ドイツがハンガリーを破って優勝した模様をラジオで聞き、優勝が決まった瞬間大喜びで外へ飛び出し、「友達とそのゲームを全て再現しました」というのである。

ラジオの音声を手がかりに、頭の中で想像を膨らませていたのだろう。新聞やラジオしか伝達手段がなかった時代、人々は"想像力"の助けを借りて様々な事象を理解していたのである。このような"情報ハングリー"状態であれば、競技場や練習場で実際にみた映像(光景)は、強烈なインパクトとともに脳裏に焼き付くに違いない。

「サッカー番組はダイヤモンドサッカーのみ」という時代も、ある意味で"情報ハングリー"状態であった。海外のビッグゲームの情報は、月1回のサッカー雑誌で入手する(時間差はあるが、それでも他のメディアが伝えてくれないので新鮮である)。活字と写真は"想像力"を膨らませる大きなヒントとなる。連続写真があればなお良い。けどもちろんそれで満足するのではなく、「動いているところが見たい!」と思う。こ

のような"情報ハングリー"状態でダイヤモンドサッカーをみていたので、脳味噌のしわの中に深く刻み込まれるのである。

"動画付きのサッカー百科事典"は素晴らしい。けど、"想像力"をはたらかせるまでもなく、いきなりホンモノの映像と出会ってしまうとするなら、情報を解釈し、膨らませる"想像力(創造力も)"はどこで育まれるのだろうと心配になってしまう。情報が豊富で「ええ時代やのう」と思う一方で、貧しかった時代の方が一つひとつの情報を大切にしていたし、その中で自然に身につけていた能力は、人間として不可欠のものであったと懐かしむのは「おじんくさい」ですかねえ。

もう一つ。"想像力"の問題と同時に、"時間"の使い方も大きな問題である。私の自宅では、WOWOW もスカパーも受信できる。BS デジタル放送も受信できるようになった。選択枝は多くなったが、みたいテレビをずっと見ていたら、1 日は 24 時間では済まない。だから(だけでもないが)、最近はめっきりビデオで録画することが少なくなった。録画してもみる時間がないからである。インターネットをみているときりがないのも同じことである。情報処理に要する"時間"を管理する能力を身につけないと、えらいことになってしまう。

ソウゾウリョク(想像力と創造力)と時間管理能力をしっかり養わないと、バーチャルな世界で完結する人間ばかり増えてしまうのではないかと心配している。まあこれも古典的な心配で、いざはじまってしまえばどうってことないのかもしれないが…